

別紙 4

報告番号	※ 乙 第 号
------	---------

主 論 文 の 要 旨

論文題目 大学生の進路意思決定遅延メカニズムの解明
—就職イメージを中心概念としたモデルの構築—

氏 名 杉本 英晴

論 文 内 容 の 要 旨

近年、大学から職業社会への移行の困難さが社会的関心を集めており、進路選択行動を開始せず進路意思決定を遅延し、進路未決定を常態化する大学生の存在が指摘されている。したがって、大学生の進路意思決定の遅延メカニズムについて明らかにすることは、大学から職業社会への移行の困難さを解明し大学生のキャリア教育・支援を検討する上で非常に意義がある。しかし、これまでの大学生における進路意思決定過程に関する研究では、就職に向けて進路意思決定は行っているが、その進路意思決定が上首尾に進まないような就職志向の学生にばかり焦点があてられ、就職することに無関心な学生や忌避的な学生といった就職志向でない学生には焦点があてられてこなかった。そこで本論文では、就職志向でない大学生の進路意思決定遅延メカニズムを解明することを目的とした。

そこでまず、これまでの進路選択行動研究や「働くこと」に対する認知表象研究を概観し、就職イメージに焦点をあてた進路意思決定遅延メカニズムの検討の必要性を指摘した。その上で、進路意思決定に影響を及ぼす社会的環境研究を概観し、進路意思決定遅延モデルの中心概念となる就職イメージを規定する要因として、準備段階の進路選択行動のみならず、社会的環境や、個人差要因を設定し、それらの規定要因が就職イメージを媒介して、進路意思決定の遅延を予測する大学生の進路意思決定遅延の仮説モデルを構成した。

大学生の進路意思決定遅延の仮説モデルの検証をするため、モデルの中心概念である就職イメージの構造を大学生の視点から明らかにし、信頼性・妥当性を備えた就職イメージ尺度を作成した。はじめに社会人との比較調査から大学生の就職イメージを明らかにし、抽出された就職イメージをもとに、就職イメージ尺度（5件法版）を作成した。信頼性と妥当性については、内部一貫性の観点から信頼性を、職業レディネス尺度と職業選択課題認知尺度との関連から構成概念妥当性を確認した。その上で、尺度の信頼性・妥当性をさらに高めるため、就職イメージ尺度（7件法版）を作成した。信頼性と妥当性については、内部一貫性の観点から信頼性を、「就職しないこと」イメージや進路未決定

との関連から構成概念妥当性を、また共分散構造分析による因子的妥当性と就業動機との関連性から収束的妥当性を確認した。最終的に、拘束的イメージ、制度的イメージ、希望的イメージ、自立的イメージの4下位尺度から構成され、一定の信頼性・妥当性を備えた就職イメージ尺度（7件法版）が作成された。

次に、このように作成された就職イメージ尺度を使用し、就職イメージが大学生の進路意思決定の遅延に及ぼす影響を検討した。その際、進路意思決定に関する適応指標と行動指標を取り上げた検討を行った。まず、進路意思決定に関する適応指標として進路未決定と充実感に注目し、就職イメージとの関連性を検討した。さらに、進路意思決定に関する行動指標として、決定段階の進路選択行動である就職活動プロセスのエントリー活動、および、初期活動に注目し、就職イメージとの関連性を検討した。また、就職イメージが決定段階の進路選択行動をサポートするキャリアセンターに対するイメージに及ぼす影響を検討するとともに、進路意思決定を遅延に導く就職イメージを規定する準備段階の進路選択行動を検討すべくキャリア探索に焦点をあてた検討も行った。その結果、就職イメージの制度的イメージ・希望的イメージ・自立的イメージは進路意思決定を促し、拘束的イメージは進路意思決定を遅延に導くことが示された。また、進路未定者において、キャリア探索の自己理解や他者から学ぶことが就職に対する拘束的イメージを高め、ネガティブなキャリアセンターイメージを高めることが示された。

こうした進路意思決定を遅延に導く就職イメージを規定する要因は、準備段階の進路選択行動のみならず、大学生を取り巻く社会的環境や個人差要因が想定される。そこではじめに、社会的環境の中でも社会階層と家族関係を取り上げ、就職イメージ形成に及ぼす影響を検討した。まず、社会階層の1指標であるキャリアモデル・ネットワークに注目し、就職イメージとの関連性を検討し、さらに、社会階層の別指標である文化階層が家族システムの機能状態を媒介して就職イメージに及ぼす影響を検討した。その上で、家族関係の中でも親子関係に注目し、親への愛着と就職イメージとの関連を検討した。結果として、社会階層は大学生の進路意思決定に影響を及ぼすが、就職イメージの形成という観点からは、家族関係を媒介した間接的な影響であり、就職イメージに直接的な影響を及ぼしているのは家族関係であることが明らかとなった。とくに、良好でない家族関係や不安定な親への愛着が、進路意思決定を遅延に導くような就職イメージ形成に影響を及ぼしていることが明らかとなった。

次に、就職イメージを規定する要因として社会的環境の中でも友人ネットワークを中心に上げ、就職イメージ形成に及ぼす影響を検討した。まず、家族関係と親しい友人グループ、および、大学生が所属する社会的ネットワークの構造に注目し、さらに、友人ネットワーク構造に焦点をあて、就職イメージとの関連性を検討した。その結果、たとえ家族関係が良好であっても、道具的な機能を有する親しい

友人がいないこと、またソーシャルネットワークの構造として交流グループ数が少ないことが進路意思決定を遅延に導くような就職イメージを形成する可能性が示された。とくに、小集団で閉鎖的な友人ネットワークを築く者の中でも、孤立型の友人ネットワークを築く者は、進路意思決定に促進的には機能せず抑制的に機能する就職イメージを形成すること、また限定型の友人ネットワークを築く者は、進路意思決定を遅延に導くアンビバレントな就職イメージを形成することが明らかとなった。

そこで、閉鎖的・限定的な友人ネットワークを築く者が進路意思決定を遅延するようなネガティブな就職イメージを形成するメカニズムについて個人差要因に注目した検討を行った。まず、閉鎖的・限定的な友人ネットワークを築く者の特徴である仮想的有能感に焦点をあて発達の観点から時間的展望を検討し、次に、小集団閉鎖性に焦点をあて不快情動回避心性を検討し、進路意思決定を遅延に導く就職イメージの形成に及ぼす影響を検討した。その結果、仮想的有能感の高い「仮想型」は就職することをネガティブにとらえており、過去・現在・未来に対して肯定的に展望しないことが示された。このことから基本的信頼の感覚が十分に形成されていないことが青年期に顕在化した結果であると示唆された。そのため、限定的な小集団を形成することは、不快情動回避心性の高い者にとっての自己制御方略の1つであり、就職への回避的な目標を設定したり、就職活動への不快情動をより強めたりすることで、就職活動への取り組みを遅延させる可能性が示唆された。

以上、本論文で検証された研究知見から、大学生の進路意思決定遅延モデルを再構成した。その結果、仮説モデルは概ね支持され、不十分なキャリア探索のみならず、大学生を取り巻く社会的環境である社会階層の低さや家族関係の不安定さ、とりわけ閉鎖的・限定的な友人ネットワークが拘束的イメージのようなネガティブな就職イメージを形成し、進路意思決定を遅延へと導き進路未決定状態を常態化させること、さらには、そうした友人ネットワークは低い自己評価を最低限維持するための自己防衛的な戦略としてネガティブな就職イメージを形成することが示唆された。これまで検討が不十分であった就職志向でない学生において、彼らの社会的環境をふまえた上で進路意思決定を遅延し進路未決定を常態化するメカニズムを明らかにできたことは本論文の意義といえる。また、このモデルから大学生に有効とされている現行のキャリア教育・支援が、就職志向の大学生に焦点があてられたものであること、そのため、就職志向でない大学生には十分な効果が得られないことが指摘された。そこで、本論文で明らかにされた進路意思決定遅延モデルの観点から、就職イメージの規定要因である準備段階の進路選択行動、社会的環境、個人差要因に焦点をあてたキャリア教育・支援の提言を行い、就職志向でない大学生に有効と考えられるキャリア教育・支援を積極的に大学教育に取り入れていく必要性が言及された。